

疫病犬と呼ばれて 下

リチャード・アダムズ

中村妙子訳



評論社

商標登録番号 第852070号 登録許可済

文学の部屋 疫病犬と呼ばれて (下)

昭和 54 年 12 月 20 日 初版発行

¥ 1,400

訳 者 中 村 妙 子

発 行 者 竹 下 晴 信

印刷所 三 倉 印 刷
製本所 株式会社 小林製本

発行所 株式 評 論 社
会 社

(〒101) 東京都千代田区神田神保町 2-16

電話代表 (265) 1 9 6 1

振替東京 8-7 2 9 4

〈検 印 省 略〉

落丁・乱丁本は本社にておとりかえいたします。

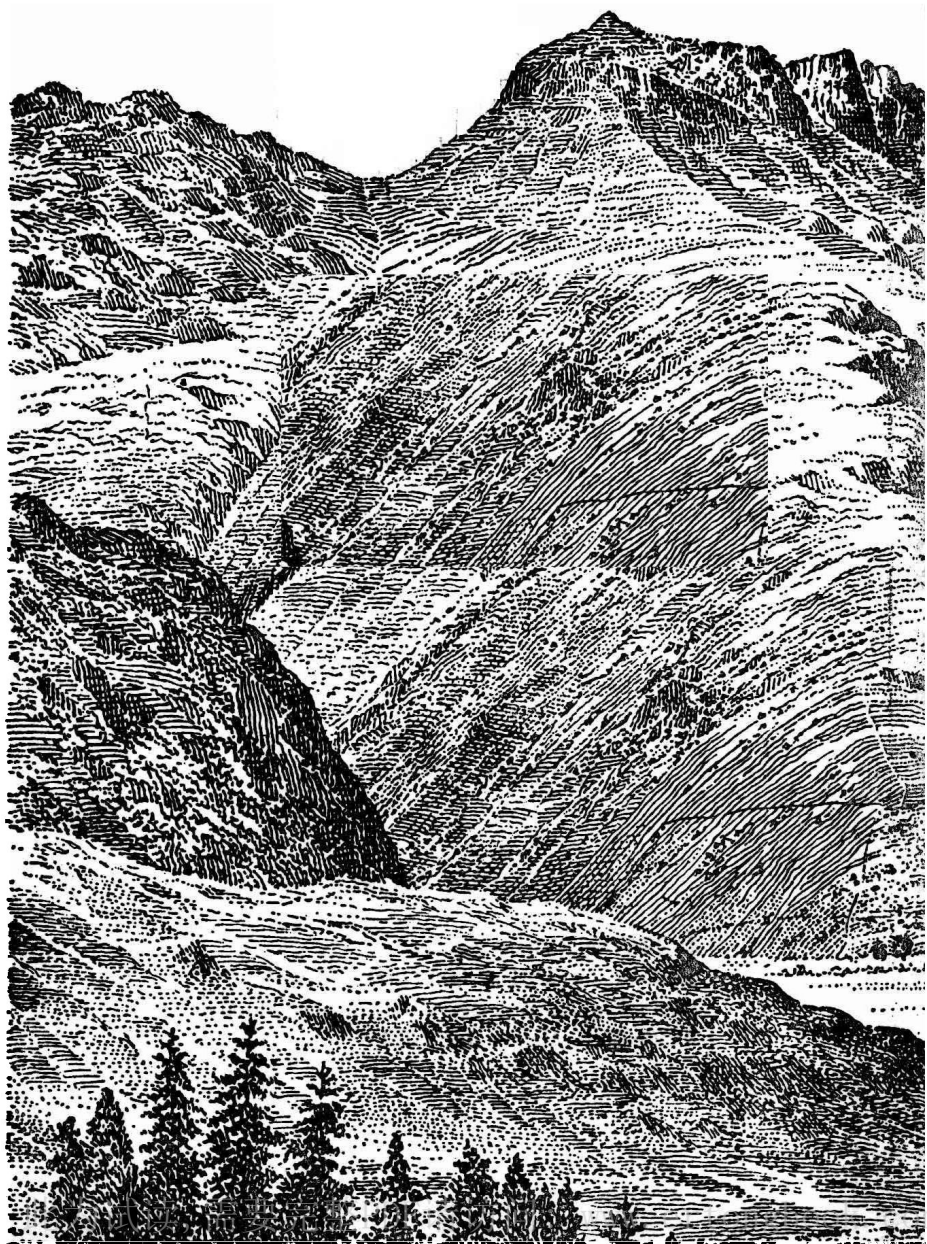
(A-1)

The Plague Dogs



疫病犬と呼ばれて 上

リチャード・アダムズ作 中村妙子訳



さし絵 A. ウェインライト

THE PLAGUE DOGS

by

Richard Adams

© 1977 by Richard Adams
Japanese translation rights arranged with
David Higham Associates Ltd., London through
Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo.

疫病犬と呼ばれて

下

十一月十日（水）

「左記の事項について、早速にお知らせを乞う。一、鼠およびノミによって媒介される病氣について。二、現在 ARSE に雇われているグッドナーという元ドイツ人の科学者について。とにかくおもしろい話を書けそうな形勢です。ドライヴァー」

「しめた！」とスキリコーン氏は両手を揉みあわせていった。「いいとも、十分に調べてやるともね！デズモンド、うまくいくと、こりゃ、当るぜ」

「まずる可能性も大ありだぞ」とシンプソン氏は首を振った。「どうして、どうして」

「何でだね？」

「さあ。おれの勘が当たらないといいんだがね、クイリアム。けっきょくおれって男はどうしようもなく猜疑心がつよいつてことかな」

「それからこれだよ」と次官は新聞の切抜きを取りあげていった。「むろん、きみもすでに読んだと思うが。心配することはまったくないかも知れん。しかしどうも氣にいらんのだよ。沖の空に妙な形の小さな雲が立ちあがった。人間の手の形をしていて変に無気味だ——といった感じがしているんだ」

「受けて立つ用意をしておくに越したことはないと政務次官によく伝えておきましょう」

次官補は心中はと嘆息しつつも、熱心な、協力的な態度を取ろうと努力していた。二人はすでに一時間にわたって合計三つの問題について論議してきたのだが、それはいずれも、ふつうなら一分そこそこで対処できるようなたぐいの問題だった。パーキンソンの法則のあてはまる適例があるとすれば——と次官補は不機嫌な氣分で考えた——この場合こそ、それだ。仕事の量は、責任ある高級官吏の多弁さに比例して増大する。」

外の官庁街には夕闇が迫りつつあり、近衛騎兵練兵場の、夕映えの明るみをおびた上空を掠めて、棕鳥が羽音を立てて飛びかっていた。何千羽もが笛のような声で囀りつつ、鳴きかわしつつ、ついと飛んできては諸官庁の帯狀彫刻を施した軒先に止ったり、歩いたりしていた。ここは彼らの時であり、揺籃であった。鳥のつややかな羽に夕明りが映えて、緑、青、紫が目まぐるしくいり乱れていた。ああ、しあわせな生きものたちよ、汝が美は筆舌につくしがたい——そう思いつつ次官補は、「されどわが守護聖人よ、われを憐れみたまえ」という氣持で次官の差し出した切抜きを受けとった。内容はともかく次官は、「これは当然おまえが先に見つけて私の注意を促すべきだったのではないかね——その逆ではな

しに」とことさらにいうのを控えることによって、まさにそう彼にあてつけているのであったから。

「湖水地方の羊を襲う謎の犬」という見だしを、まず次官補は読んだ。「ヘオラター」現地特派員ディグビー・ドライヴァー記」次官補はその記事に目を走らせた。大意をかいつまんで手っとり早く頭に入れることができれば、「この記事は自分も気づいてはいたが、お忙しいあなたを煩わすまでもないと思つて」とかなんとか、いい抜けられるのだが。

「ええ、私もこれは読みましたよ、モーリス。ですが、べつに大したことはなさそうじゃありませんか？ たとい、動物生態研究所が一、二匹犬を逃がしたことを認めたとして、そのうちの一匹がこのイーフレイムとかいう男の死の原因になったとしてもですよ、影響のおよぶ範囲はごく地方的ですし、大臣の威信を傷つけることにはならないと思いますけどねえ」

「それはまあ、今後の進展いかんによるね」と次官はうつむいて、ボタン穴に挿した英霊記念日のケシの造花を必要もないのにちよつと直した。「大臣は目下いささか感情的になっておられるんだよ。財政問題について下院で攻撃されたばかりだね」

「しかし、それとこれとどういう関係があるんです？」

「あるとはいっていない。ただ、そうした可能性がないわけではないといってるんだ」と次官は年とつた羊のような歯並を見せて、物柔らかに笑った。「数年前、われわれ——というよりわれわれの前任者——は大臣に、サブロン委員会の勧告を受けられるよう、助言した。なかんずく、ローソン・パーク計画の承認をね。いらい、年間の予算の中から、多額の金が同研究所に回されている。きみも知つてのとおり、ローソン・パークの計画にはそもその初めから反対があり、公費を無駄づかいしている研究

所が不注意にも犬を逃がすとはなにごとだといったてる者がこの際出るかもしれないのだよ。そうならこちらにとっては具合がわるい。研究所が国立公園内に置かれていてというだけでもやっかいなところもつてきて——」

「どうしてです？　大気汚染の原因になっているわけじゃなし、交通量があの研究所のためにとくにふえているわけでもないのですか？」

「わかつてる、わかつてるよ、マイケル」と次官はもちまえの気短そうな声音でいった。「だが研究所は国立公園内では好ましからざる居住者だからね。それに、設置には政府の認可があったんだからね。

問題があるとなれば、野党はえたりかしこしと攻撃を仕掛けてくるだろう。さて、きみ、せっかくのおもしろい論議だが、この辺で切りあげなけりゃならんらしい。私も用事があるし、おそろく、きみもそうだろう。（「へえ、そうですかね」と次官補は心中ひそかにうそぶいた。「そんなにご多用とは、とても信じられません！」）あしたの晩、一、三の問題について政務次官と協議するんだが、その際、この件については、心配はいらないといいきりたいんでね。現地の人間で誰か、信頼のおける人物はいかな——こっちとたえず連絡をとってくれるような？」

「ええ、多少はいます。ボイコットという男とよく電話で話すんですがね」

「そうか。だったら、研究所ではこのことをどう考えているのか、訊いてみてくれないか？　とくにあそこから逃げた犬がほんとうにいるのかどうか、いるとすれば、それについてどんな処置を取ったかをね。できれば、言明したいんだよ、公に。」
「バスカヴィル家の妖犬」（コナン・ドイル作のシャーロック・ホームズが登場する推理小説）なんてものが、たとえいたとしても、ローソン・パークから逃げだした奴じゃないとね」

「いいですよ、モーリス、承知しました。(まったく婆さんみたいな男だな！ 次官ともあろう人間がこんな下らないことをくどくどと！)」

「わかってくれるだろうね？ 余計な心配と思うだろうが、マイケル、私はもともと、事前に最悪の状態を予想しておくたちでね」

廊下に出ると、次官補は立止って、黄昏のセント・ジェームズ公園を見おろした。大きな、樹皮のむけたニレの木の梢でつぐみが歌い、遠くの池の上にペリカンが一行になって泳いでいるのが見えた。頭をいっせいに水の下に突っこんだり、あげたりしながら。厄介な問題のもちあがったときや、気持ちがくさくさするときによくするように次官補はミルトンの(ヘリシダス)の一節をくちずさみはじめた。

いまひとたび、われはきたりぬ

ああ、月桂樹よ、

枯れることなき蔦をまとえる

緑濃き、やまもの木よ――

*

霏が濡れた、弾力のある布のように鼻面にまといついていた。形がなく、搔きのけることができないだけ、始末がわるかった。ローフはまたもや前足で顔をこすり、なんマイルにもわたって草の上にひろがっている雨中の蜘蛛の巣のような霏を払いのけようとつとめた。前方と後方から、押し殺したような

川音が響いていた。星は見えなかった。微風すらなく、漂ってくる香りもなかった。霧そのものの中に立ちこめて、その一部を形づくっているもろもろの香り——羊とその糞のにおい、ヒースや、石垣のあいだにちらほらと頭を出している、葎や苔などのおいのほかには。人間にしろ、鳥や、獣にしろ、生きものの立てる音はまったく聞えなかった。ローフと狐は霧の天井の下を、霧の壁の切り立つ道を、霧の茂みを、肩で押しわけて進んでいたのであった。しかし霧は現実の木立や茂みや塀とはちがひ、不確かさと、誤謬に限界を設けてくれなかった。塀にそった道なら、行くか、もどるか、とにかく道ぞいに行くしかない——正しいにしろ、誤っているにしろ。しかしいま狐とローフが辿っているのは奇妙な道だった。霧はあつと思う間に消え、壁があちこちに立ちあがるかと思うと、あつと思う間もなく、また見えなくなったりした。目の前が急に開けたり、後ろから霧が迫ってきたり、一方の方向にだけ立ちこめていると見えるが、その実は、どこもかしこも白い蒸気に覆われているといった具合で、ローフは戸惑うばかりであった。

ローフは狐と並んで、だだっ広い真空の中をとぼとぼと歩いてた。疲れきつてはいたが、体の疲労よりも無知と疑いと不確かさからくる緊張でへとへとになっていたのであった。三時間ばかり前、あたりが暗くなるとすぐ、彼は狐と連れだつてリックルデルへくだった。スニッターはまたもや意味もないわごとをいいはじめ、自分がどこにいるかということすらわからない状態だったので、やむをえず、堅坑の中に残した。朝がたスニッターを求めてハーター・フェルを探し歩いたあげくに物置小屋から救いだす騒ぎで、ローフは疲れきつていたから狐の助力だけで羊を狩りたてるとなど、とてもできそうにないと見切りをつけた。それで狐と相談の上、せいぜいのところ、鶏小屋を襲うか、それも無理

だったらごみいれをあさろうときめた。人家が多く、車の通行のはげしい、したがって犬や人間がたくさんいそうな危険な所にあと半マイルというブロートン・ミルズの郊外で、おりよく急にたちこめた霧に助けられて、狐とローフは（というよりローフは）弛んでいた鶏小屋の金網をこわし、二羽の雌鶏を奪って、暗がりの中に逃走した。ほろほろちやうがやかましく鳴きたて、かつかつ二十ヤード向うでだれか男が罵声をあげて懷中電燈を振りまわしたが、けつきよく、その光の照らしだしたのは動かぬ霧の帷だけだったのであった。

狐はくわえてきた雌鶏の死骸を下に置き、まわりを包む寒気の中に白い息を吐いた。「ニワトリヤ、アヒルヲカッサラウトキハ、モヤノデルバンニカギルンダヨ。ホトンドヨッピテアサリアルイテモ、シリニテッポウノタマヲウチコマレルダケッテコトダッテアルンダカラ」

針金の先がローフの鼻の傷口をあげ、鋭い痛みを覚えさせていた。

「イッタイ、ナニヲサガシテルンダネ、ウロウロト？」と狐が苛だたしげに訊いた。

「水溜りだよ」とローフは霧の中に姿を消しながらいった。「冷やっとする、気持のいい水溜りだよ」ペチャペチャと押し殺したような音がひとしきり聞えたと思ううちに、ローフはまたもどつてきた。「少し気持がよくなったよ」

「オメエ、ヒドクヨワツチャマッテルヨージャネーカ」

「狐、帰り道をどうやって探す？　ここはどこなのか、おれにや、てんで見当がつかないよ」

「ジメンハココカラコッチヘノボリ、アッチヘサガッテイル。ミチヲマチガウシンパイハネーヨ。サシアタツテハノボリダナ」

「時はもうじきかい？ 畜生、なんてべたべたとうるさい蜘蛛の巣だ！」

「フットバシチマエヨ、クモノスナンザ。アア、ネグラニハカナリチカイヨ。ジメンノカンジデワカル。モースコシイクト、アルキヨクナル。ダガオメエノソノハナハ、ズイブンヒドクキレテルネ。エラクカッサイタモンダナ」

「なに、だいじょうぶだよ、狐。それよりスニッターをどうしよう？ あいつのこと、おまえ、どう思う？」

「スッカリ、クルツチマッテルナ、アイツ。ケサモ、ジブンノアタマンナカニジブンガイナイトカナントカ、ヘンナコトラホザイテタツケガ。テンデオカシクナッチマッテラア」

「ああ、たしかに具合がわるそうだな。こんなにひどかったことはないくらいだ。だがあの発作はいずれやむよ——すくなくともいままではそうだった。厄介だが、さしあたっては奴はあそこに置いとくほかあるまい。おれたち、奴なしで狩をすることになるな」

「アソコニオイトクワケニヤ、イカネーナ。アソコニヤ、オレタチ、ダレモイラレネーヨ。モヤガタチコメテルアイダニユクエラクラマサナキヤ」

「またかい、狐？ スニッターにや、とても歩きとおせないよ。遠くまで行くのかい？」

「ジュウヲモッタオトコロコロシチマッタッテイウ、アイツノハナシダガ——オメエ、ホントダトオモウカイ？ ソレトモ、クルツタアタマカラデタツクリバナシカナ？」

「ほんとうだよ。おれが聞いたところじゃ、ハード・ノットで羊を殺した後、スニッターはひとりでもどる途中でその男に捕まったらしいよ。スニッターが驚かしたんで、男が誤って自分を射ったのか、

それとも引金にスニッターの足がひっかかったのか、とにかく死んじまったのさ」

「ソレデ、シガイハミツカタノカ？」

「見つかったともさ」とローフは狐に、コックリー・ベックであぶなく射たれるところを逃げだした次第について話した。狐は黙って耳を傾けていたが、ふたたび丘をのぼりだした。

「マツタク、アノチビハタイヘンナヤツダナ。ニンゲンヲウツタナシテ、トテモジャナイガ、シンジラレネーヨ。シカシ、コマツタナ、ドーモ。ヤツラ、オメエラニヒキヲミツケルマデ、トコトンサガスニキマツテルヨ。オレニフンベツガアリヤ、オメエラナンゾ、ホツタラカシテニゲルトコロダガ」

「そうなたらおれたち、お終いだよ。狐、おまえがいなかったら、とうの昔に死んでいただろうからね」

「ソリヤマズ、マチゲエノネートコロダナ。イッタイナゼ（と狐はいったん言葉を切った）、ナゼ、オメエラヲホツタラカシニシチマワネーノカ、ジブンデモワカラネーンダヨ——マー、イイヤ、オレノユートーリニスルンダゼ、ブツブツイワネーデ。サモネート、コンドコソ、オメエラヲオイテケボリニシチマウカラナ。ソーナリヤ、ジブンデナントカヤツテクホカナクナルゼ」

「どのぐらい歩くんだい、狐？」

「カナリナ。マー、フタバソハカカルダローヨ。アシタノアサマデ、ブル・クラッグニカクレテイヨウ。アノチビニアソコマデアルケレバダガ。ソレカラ、ワイズバートダンメール・レイズヲトオツテイク。レイズハ、ヨルノウチニイソイデヨコギルホーガイ——ミチヲクルマガトオツタリ、アカリガサシタリシテイネートキヲエランデナ」